

# ひなぎくの森 第8話 文\*sawori

駅前ロータリー商店街唯一のライブハウス FREEMAN。今日は毎年恒例クリスマスブのライブイベントで、早めに店を開めた若手のオーナー勢が集まり、ちょっとした忘年会のようになっている。

「あ、松山さん、もう店閉めたんすか？早・・・」

「わ、誰ですか？このイケメン！」

フランソワが、お〜いお茶片手に近寄ってきたイケメンに驚いた。

フランソワは母国フランスで日常的にイケメンをたくさん見ているため、日本ではテレビを見ていても「この人、どこがイケメンですか・・・？」「これがジャパンの国宝級ですか？」と冷めた目をして見ているので、これはとても珍しいセリフと言えよう。

「うちのバイトの加瀬椿くんだよ。で、店長がマネージメントしてるバンド「トルーマン」のボーカルでギターさんです。」とひなぎくがアナウンス。

「oh・・・イケメンでバンドマン・・・」なぜか敗北したようなフランソワ。

「加瀬は作詞作曲もしてるよ。1年前にここでライブ見てさ、これはちょっとすごいと思って、マネージメントという大層なもんじゃないけど、ライブ組んだり、スタジオ貸したりレコーディングしたり？して関わってるんだ。」

「松山テンチャーを唸らせるイケメン・・・」

「あ、例のひなさんとここでホームステイしてるってゆうフランス人？」

「そう、フランソワ。正確には、私のおばあちゃんのところね。私ドリンク取ってきます。

店長はジンジャエールでフランソワも未成年だからそれにしとくね。」

勝手知ったるといふ雰囲気、ひなぎくがカウンターに向かった。

「フランソワ、日本語うまいね。」と、加瀬がフランソワに近寄り、小声で「ひなさん、あの人自分の可愛さとか価値とかなんか完全に気づいてくない？」と言った。するとフランソワの目がキラーンと光り「ツバキ！あなたはよく分かっている！」と握手をしながらその手をぐるぐるんと回した。

「ひなぎく、顔はもちろん可愛いですけど、そう、マリエ似ですけど」

「ひなぎくね、昔のチェコ映画の」

「はい、それで Une femme est une femme のアンナ・カリーナにも似てるし」

「えーと、「女は女である」かな？確かに言えてるかもな」

「初めて見たとき、お花の冠つけて寝ていたんです」

「え、なにそれ、かわい・・・」

「なのに、さっぱりとした性格、音楽や映画のカルチャーに精通していて趣味もいい。」

「フランソワくん、キミとは親友になれそうだね。」

斯くしてひなぎく友の会が結成されたのであった。現在会員、超イケメンが2名なり。

## \* ひなぎくの森のカルチャーその日 \*

### アンナ・カリーナ



アンナ・カリーナはデンマーク・コペンハーゲン出身のフランスの女優。ヌーヴェルヴァーグ時代に活躍。映画監督のジャン＝リュック・ゴダールとは10歳差の年の差婚をするも離婚。ヌーヴェルヴァーグを代表する女優さんであり、ファッションアイコンです。



「女は女である」とにかく可愛いアンナが見られる一押し映画。真似したいファッションが満載です！



「気狂いピエロ」ゴダール代表作であり、アンナも超絶可愛いヌーヴェルヴァーグの傑作！

今回結成された、ひなぎく友の会。そこで明らかになるひなぎくの容姿は、「ひなぎく」のマリエであり、アンナ・カリーナという事でしたが、ひなぎく自身は自分に自信もなくそんなオーラはありません。でも2人から見たらその素質を備えた女性に映っています。私のイメージではオーラのない小松菜奈ちゃんです。ちなみに今回登場の加瀬椿くんモデルは神尾楓珠くんをもっとモサクした感じです。イケメンなのに髪ボサボサでサンダルな感じです。椿にとっては顔はコンプレックスなのです。

(前回までのあらすじ) フランス人留学生フランソワと、レコード店員ひなぎくのカルチャー交流記。クリスマスに同じ商店街の「街角ブック」小桃に花束を贈る松山店長。特に2人の間には進展はなく、エバグリのもう1人のバイトが行うクリスマスライブを見に、舞台はライブハウス Free Man へ。

\* sawori \*